長く住み続ける住宅のための仕上げ・造作・収納のデザイン

エクスナレッジムック
Summer 2017
29

建築知識 質の高い家づくりをサポートする住宅専門誌

ビルダーズ

流行に左右されないインテリア

竹原義二・川口通正・横内敏人
オークヴィレッジ・大角雄三の設計術

ホテリ・アアルトに学ぶ
居心地の解き方

鎌田紀彦が教える
気密・換気の本当の真実

エントリー
受付スタート!

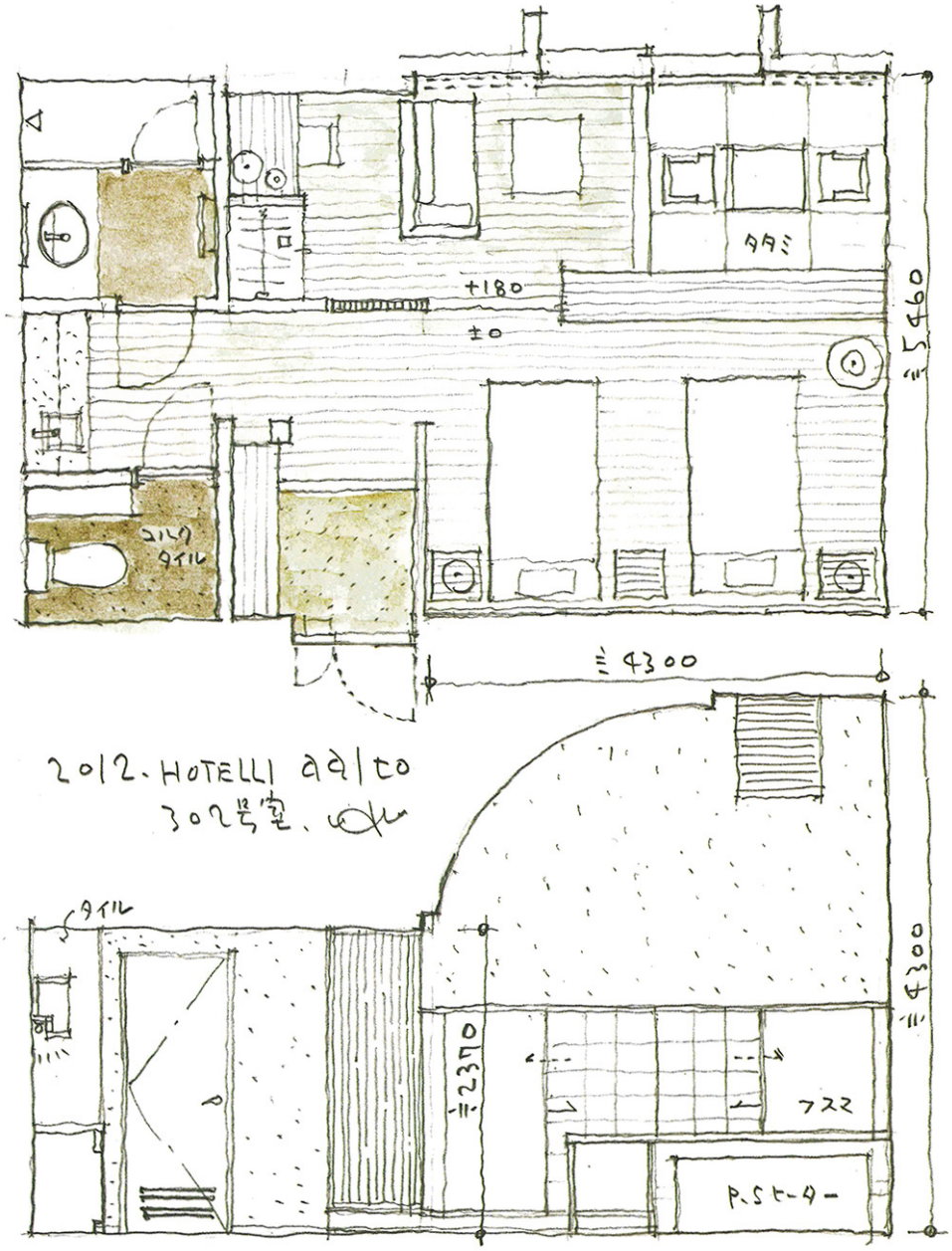
第3回
日本エコハウス大賞

JEH

北欧の暮らしをイメージとしたインテリアが特徴的なリゾートホテル。築40年の山荘を益子義弘ら3名の建築家によってリノベーションし、2009年に開業した。源泉かけ流しの温泉なども備える。
設　計：益子義弘、河合俊和、大竹慎太郎
開業年：2009年
所在地：福島県耶麻郡北塩原村

ホテリ・アアルト 302号室

居場所に変化を与える天井面の操作

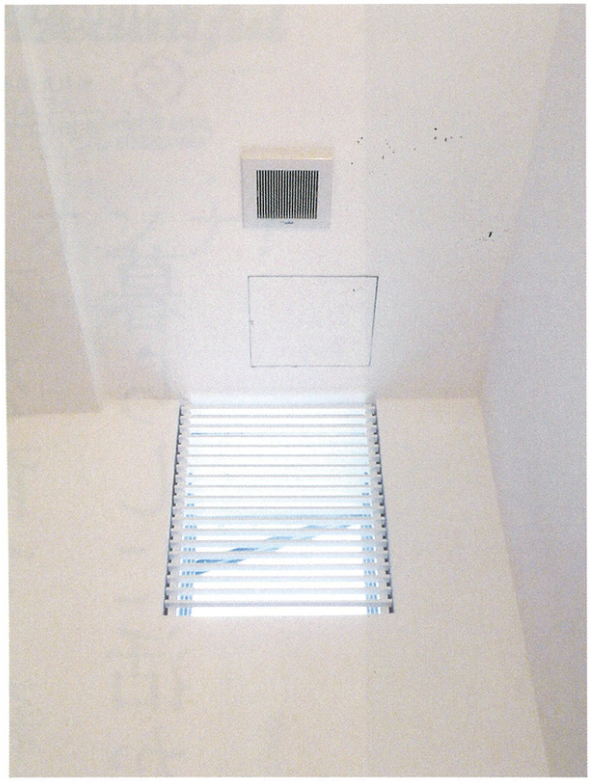


ホテリ・アアルトにはじめてお世話になったのは2009年の暮れ、夫婦でのんびりと訪れました。

会津・裏磐梯の森の中に佇む建築の魅力はもちろん、内部の柔らかで優しさに溢れる益子義弘さんらしい空間、地元の素材で創られた和と洋の食事、敷地から湧き出る温泉と、3拍子揃ったコンフォータブルで希有な宿です。その魅力に取り憑かれ、それから何度も通うことに…。

2度目に家族で泊めて頂いた部屋が3階の302号室。まるで教科書のような無駄のないプランにアールの天井を持つ、伸びやかな部屋です。

益子義弘さんは居場所を創り上げる時に、天井面の操作を行う傾向があると、常々感じています。居場所を暗示するようにその上部の天井を変化させ、居場所を包み込むように、柔らかな曲線をふわりと浮かせるのです。私も益子さんのその手法が好きで時々、設計に取り入れさせて頂いております（笑）。



最上部でも段差を付けているのは1／4円の美しさにこだわったからか？

低い天井との取り合いはエッジを効かせるため

収納扉の手掛けもひと工夫

高窓はルーバー付けてで光を和らげている

和室へ向かって天井が高くなる

302号室の天井は、棟に向かって天井がうねってのぼっていく、タテのベクトルを感じる操作がなされています。そして、益子さんのアール天井の特徴は切り返し部分（壁天井との取り合い部分）。そこが「いいなあ」と感じたので早速、実測!!

低い天井からアールに繋がる時に、アールの形が明快になるように、段を付けて切り返し、高い天井でそのまま壁にぶつけるのではなく、ここでも段を付けて切り返し、壁に当てています（共同設計者で、僕の藝大時代の先輩でもある河合さんの目配りだとも聞きますが）。

高窓の高さを間違えたのだろうか？と一瞬考えてしまいそうな納まりですが、設計者としての視点からすると、1／4円の美しさにこだわったのだと思うのです。柔らかさと優しさの中にキレを感じる美しいディテールです。

Satoshi IREI
Architect

1959年沖縄県生まれ。'83年琉球大学理工学部建設工学科卒業。'86年東京藝術大学美術学部建築科大学院修了。丸谷博男＋エーアンドエーを経て、'96年伊礼智設計室を開設。東京芸術大学美術学部建築学科非常勤講師

編集巻頭

前号から今号までに考えたこと

木藤阿由子・本誌編集長

次の号が出るまでに3カ月。
その間、多くの工務店や設計事務所の方々と会って話を聞きます。
ここでは、そんな皆さんの声から、誌面づくりのエネルギーに
なったことや考えさせられたことを書いてみたいと思います。

ホテリ・アアルトのオーナーであり八光建設の代表取締役社長の宗像剛氏（左）と建築家・益子義弘氏（右）。205号室にて（撮影：雨宮秀也）

受け継がれてゆくもの

今号の巻頭企画（P17〜）は、福島県裏磐梯のホテリ・アアルトです。取材をしてから知ったことですが、このホテルのオーナーは、地元の工務店、八光建設の社長の宗像剛氏でした。もともと保養所だったこの建物を八光建設が管理していて、その縁で建物を取得することになり、ホテルにリノベーションしたそうです。

それなりに規模のある築40年の木造建物ですから、リノベーションしてホテルにするという決断はそう簡単にできるものではありません。古民家のように古さがそのまま意匠になるようなものでもなかったのでなおさらです。それでも宗像さんがリノベーションにこだわったのは、「古いものを大切にしていく、古くなっても使えるものをつくる」という自社がかかげる理念に基づいてのこと。設計を依頼した益子義弘氏（建築家・東京藝術大学名誉教授）にも、柱・梁を取り除かないことを条件にお願いしたそうです。

なぜ工務店がホテルを…？　それは、自分たちの考える住空間を体験してもらう場として、ホテルが最もよいと考えたからでした。そのため、ホテルには住まいのような居心地が求められました。さらに「四里四方で調達できる材料で家をつくる」という八光建設のこだわりも反映され、このホテルでは木部のほとんどに福島県の地場材が使われています。

「この仕事はチームの力の賜物だからね」

制作中、益子さんから何度も言われた言葉です。決して自分だけの作品ではないんだよと。設計は、益子さんのほかプランやディテールを追求し図面に落とし込んだ河合俊和さん、現地の状況や自然環境を把握し現場に繋いだ地元設計事務所の大竹慎太郎さん、計画進行のアドバイザー役を努めた梅沢典夫さんらの力がおおいに発揮されました。さらにオーナーであり、施工会社でもある八光建設と同社率いる地元の職人衆がそれを形にしました。「みんなのパワーが同じ方向を向いていたからできた」と益子さん。建築には、つくり手の心意気が宿るもの。ホテリ・アアルトは、オーナーの理念と、それに応えた建築家たちのしなやかな発想の数々、それを形にしたものづくりの姿勢が三位一体となって、心地よさを奏でているのです。

後世に受け継がれる建築とは、建築の力だけでなく、つくり手たちのパワーが、建築を介して次世代に伝わったときにはじめて受け継がれていくものだと思います。そこで、若手の住宅建築家である関本竜太さんにこの特集の解説をお願いしました。関本さんがホテリ・アアルトで感じたことを、読者のみなさんがどう受け取るのか。つくり手たちの手を離れた建築の受け継がれ方を見てみたくて。

巻頭企画

ホテリ・アアルトに学ぶ

居心地の解き方

文：関本竜太（リオタデザイン）

せきもと・りようた／1971年埼玉県生まれ。'94年日本大学理工学部建築学科卒業後、エーディーネットワーク研究所に勤務。2000年フィンランドのヘルシンキ工科大学（現アールト大学）に留学。'01年フィンランドの設計事務所でプロジェクトに関わる。'02年リオタデザイン設立。

HOTELLI aalto

磐梯朝日国立公園内、福島県・裏磐梯の豊かな自然のなかに建つホテリ・アアルト。地元の木を使って設えられた建物のなかは、リゾートホテルというよりも、住居のような温もりで満たされている。

おかえりなさい。

木製の客室扉が、そう語りかけるように来訪者を優しく迎え入れる。中に入ると、まるで自分の部屋に帰ってきたような安心感を覚え、一気に心身の緊張がほぐれる。この居心地のよさは、一体、どこからくるのだろうか。

監修：益子義弘（益子アトリエ）
協力：宗像剛（八光建設／ホテリ・アアルト代表取締役社長）
河合俊和（河合俊和建築設計事務所）
大竹慎太郎（大竹建築研究室）
撮影：雨宮秀也（17・18頁、19頁上右、21〜26頁、28頁下、29〜31頁、39頁、41頁、42頁上下、43頁上・下左、44頁、46頁）
塚本浩史（33頁下、34頁下、36頁左、37頁、45頁上右下）

304
ROOM

すべてのものを受け入れる おおらかさに包まれる

去る3月、私はスタッフを伴い、事務所の研修旅行としてホテリ・アアルトを訪れた。スタッフの慰労を兼ねた旅行でもあったが、本当の目的は別にあった。

住宅とはおもてなしの建築である。最高の住宅をつくりたいと日々願っている私たちは、それがどういうものかを、どれだけ知っているだろうか。空間によって人をもてなすとはどういうことか、ホテリ・アアルトでの滞在を通し

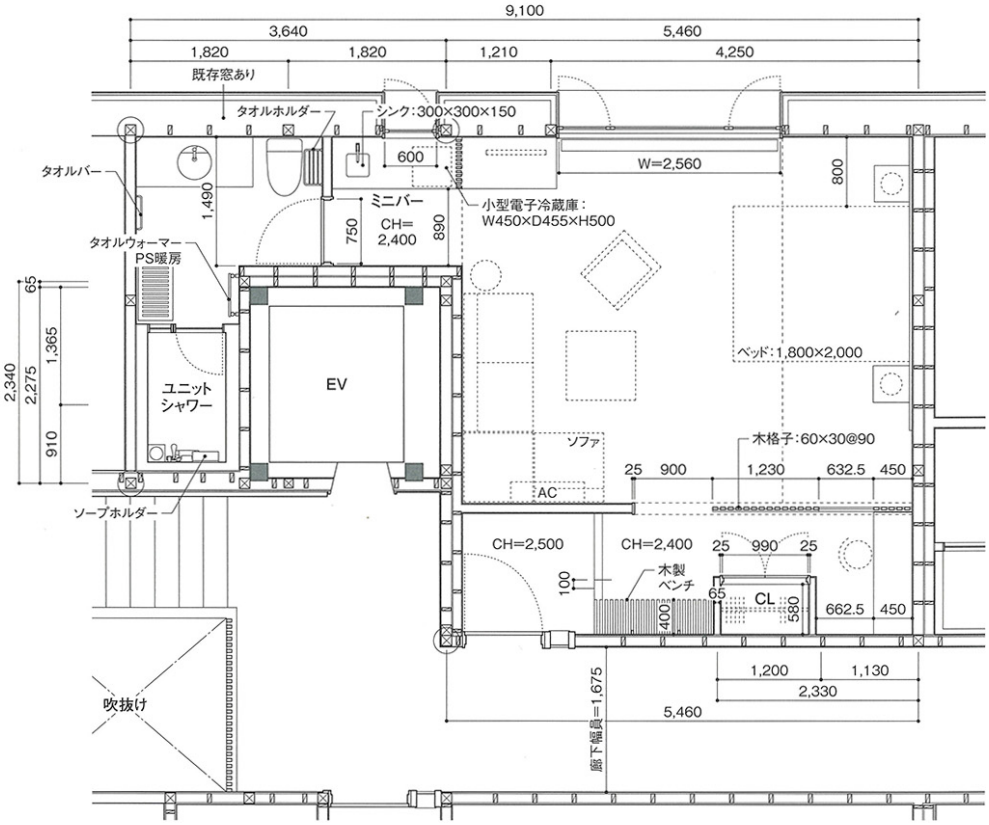
部屋の中央には、デンマークのアルネ・ヤコブセンのデザインによるエッグチェアが置かれている。多くの場合、博物館などでしかお目にかかることのできない逸品である

てそれをもう一度見つめ直したいと思ったのである。

私たちが今回、見た部屋のなかで、まず紹介したいのが304号室だ。この部屋に入るなり、スタッフは意表を突かれて、わぁ…と声を上げた。柔らかな曲面を描く高い天井に、赤のエッグチェア。窓の外に視線を向ければ、遠くに美しい山の稜線が描かれている。どうだ！と迫ってくるというよりは、来訪者を静かにじっと待ち望んでいたような、そんな空気が部屋全体を包んでいる。

クロゼットを隠すように立てられた木製格子は、小さなスペースを圧迫せずに緩やかに仕切り、明るく機能的に使える場所を生み出している

小さな居場所と大きな居場所



平面図 S=1:80　※検討図面のため、水廻りや窓廻りなどの一部が実際と異なります

部屋は、4.5mもの高い天井高のベッドルーム（断面図は22ページ）と、エントランスからつながる少し天井の低いデスクスペース、そして奥まった位置にある水廻りスペースに分かれている。後ほど詳しく述べるが、ホテリ・アアルトは、保養所だった建物をホテルにリノベーションしており、この階は食堂だった場所を客室につくりかえているため、一般的なホテルの客室では珍しいスケールになっているのだ。

特にこの部屋は、エレベータシャフトを抱き込んでいることから、プランが極端に変形していて、突き当たりの小さなスペースをシャワールームにすることで、プランの破綻を回避している。使い勝手も損なわれておらず、ユーティリティの各機能が整然と並ぶさまには、この部屋が変形していることすらも忘れてしまう。

ミニバーからトイレを見る。その奥にシャワーコーナーがある。左の壁の裏側がEVシャフト

304
ROOM

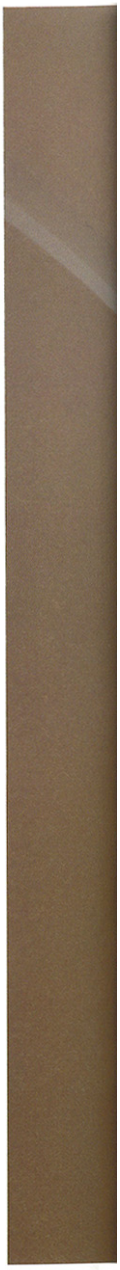
ボールト天井がつくる柔らかな光のグラデーション

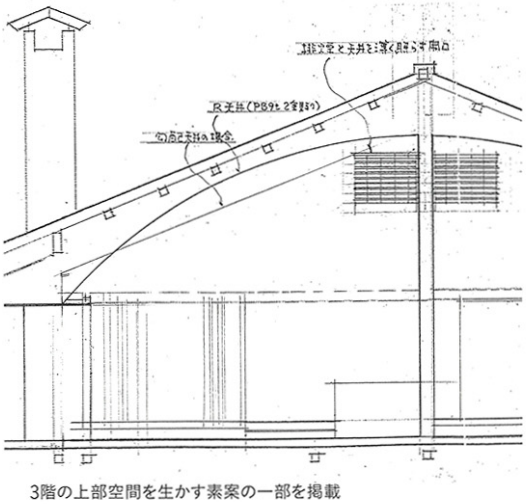
3階の客室には、ボールト天井の頂部にハイサイド窓が設けられている。水平ルーバーによって拡散された光が天井を照らす

この部屋の居心地は、このボールト天井にあるとみている。高天井部は緩やかな曲線を描いて部屋を包み込んでいる。曲率は1／4円に近いが、やや緩く抑えられているようだ。そのことにより、始点となる壁との取り合い部にはかすかな光のシルエットが走る。

ボールト天井は頂上部のあたりでわずかに折り上げられ、フラット天井へと切り替わっている。緩やかな光のグラデーションは、頂部に近づくにつれ影を深め、そして再び折り上げ天井により明確な光のエッジをつくる。この劇的な光の演出を導いているのは、最上部に設けられたハイサイド窓である。

このハイサイド窓には水平ルーバーが設けられている。このことにより、朝にベッドを射抜くような光が入ることを防ぎつつ、同時に天井面へ光を拡散させる役割も





3階の上部空間を生かす素案の一部を掲載

果たしている。

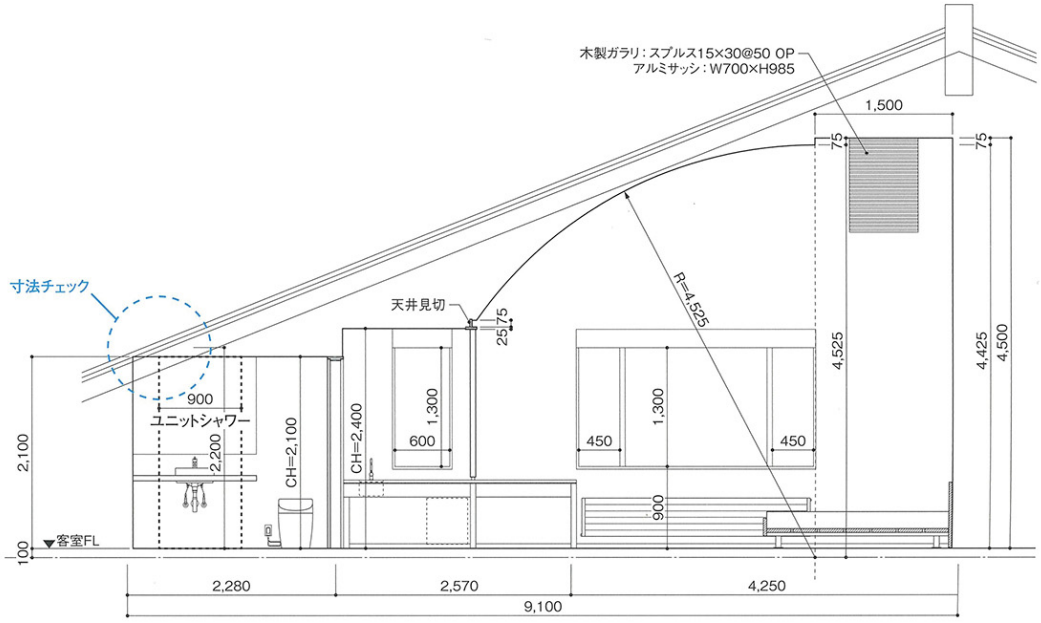
益子氏による計画の初期スケッチにも、この窓には天井に光を拡散させる目的の水平ルーバーが描かれている。ちなみに最初は、この天井を直線で構成する案も検討されたようだ。

ボールト天井の始点にはソファが置かれ、曲面天井の伸びやかさを最も感じられる場所となっている（右上）。ユーティリティスペースの入口はまるで洞窟の穴のよう（右下）。障子を閉めると空間全体が柔らかな光に包まれる（左）

304
ROOM

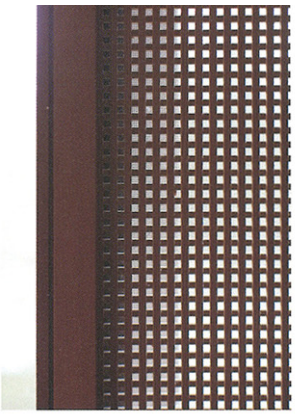
窓に切り取られた景色が一枚の絵のように

断面図 S=1:75
※検討図のため、水廻りや窓廻りなどの一部が実際と異なります



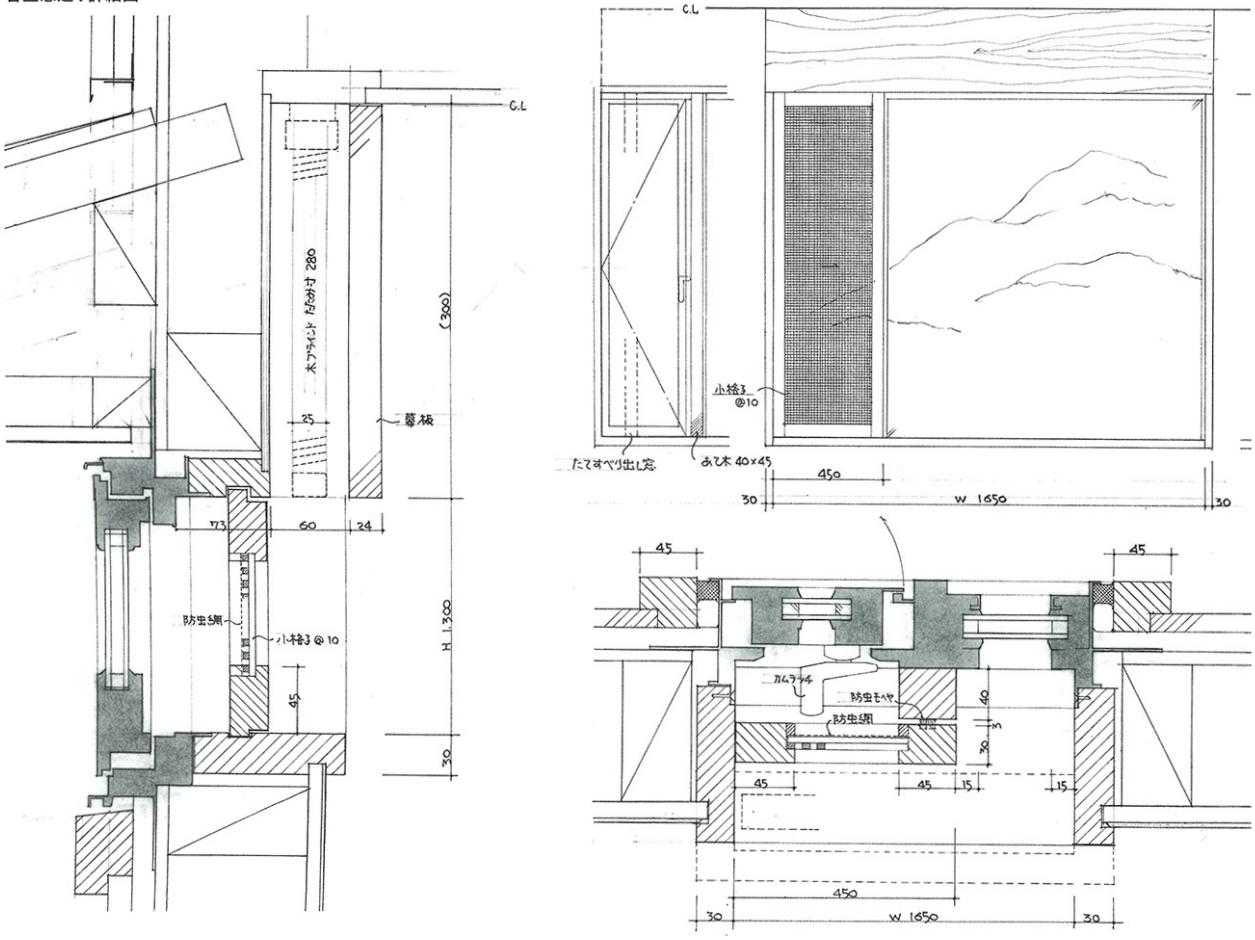
304号室の窓。大きな吹抜けに対して、比較的低く抑えられた開口部。そのぶん景色が印象的に映える

木製の格子網戸が窓を優しくする



このホテルのために特別に製作された、特殊技法による格子網戸

客室窓廻り詳細図



部屋側に取り付けられた遮光用の襖戸

窓の遮光機能については、部屋のプランに応じてさまざまな解決が図られている。304号室では引込みとなる遮光襖戸と障子とが併用されているが、ほかにも木製ブラインドを用いて窓廻りをコンパクトに納めた客室もある。サッシは気密・断熱性を確保するため、樹脂アルミサッシのFIX窓と縦辷り出し窓による連窓としている。縦辷り出し窓には標準の網戸ではなく、オリジナルの格子網戸を取り付けている。この小格子は、室内側からのアルミサッシの素材感を消すとともに、窓からの風景ができるだけ鮮明に見えるよう、眼のグレアをやわらげるはたらきをしている。

304
ROOM
柔らかな光の下で穏やかに
目覚める贅沢な朝

2階の隅の部屋、201号室

201
ROOM

元は
管理人室だった
という
この部屋が、
このホテルを
象徴する空間
となった。

201
ROOM

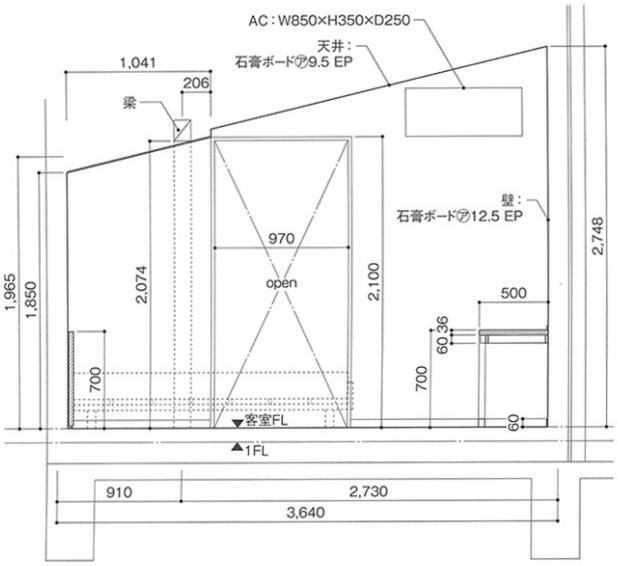
屋根裏部屋にいるような籠り感が心地よい

ほかの部屋と比べて、コンパクトなつくり。斜めの天井と絞られた窓が、籠り感をより高める

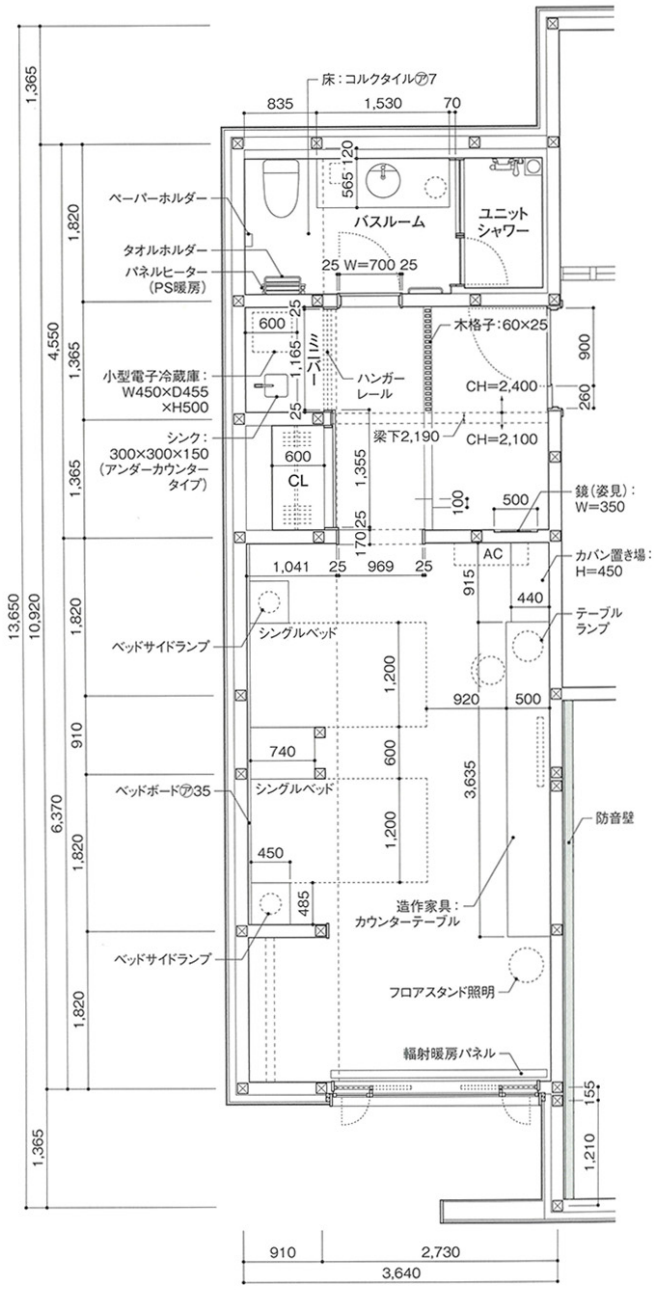
改修を手がけた建築家・益子義弘氏は201号室が好きだという。ホテル側に特に希望を言ったわけではなかったが、私にあてがわれた部屋は201号室だった。2階のほかの客室が高さ2.4mのフラットな天井であるのに対し、この客室の天井は低く片流れに傾斜している点がその大きな特徴である。建物の最も西寄りに位置しており、断面図で見ると大屋根下の小屋裏とも呼べるようなスペースである。

傾斜天井はこの屋根傾斜がそのまま室内に現れているものであり、どこかヒミツの隠れ家のような趣がある。保養所だった時代には、ここは管理人室だったそうだ。それが今では人気の客室になっているのだから、興味深い。

201号室は客室のなかでは唯一の整形、長方形プランとなっている。そのことにより、客室に入るとパースを伴って部屋の全体像が一望されることになる。この特徴的な低い天井下のベッドに潜り込めば、安眠は約束されたようなものだろう。



断面図 S=1:50



平面図 S=1:80

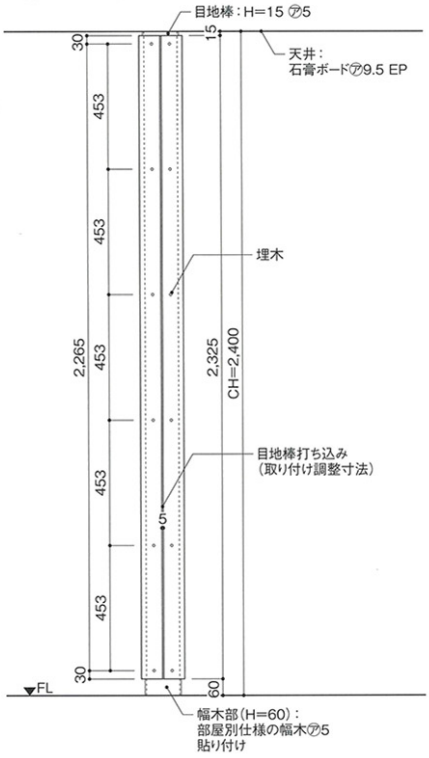
長方形の部屋は、入口を挟んでベッドスペースとユーティリティに分かれる。窓際には残した既存壁によって、小さなソファコーナーがつくられている

201
ROOM

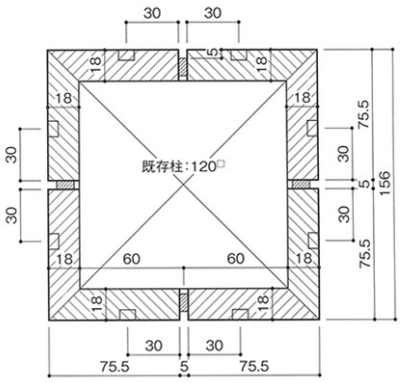
2つの寝床を仕切る2本の柱

既存の柱にタモ材を被せ、スリットを入れることで全体が重たく見えないようにしている

立面図 S=1:25



平面図 S=1:4



部屋の中央に立つ特徴的な2本柱は、1本は既存柱を生かしたもの。もう1本は添え柱となっており、あとから付加されたもののようだ。本来は1本でよいものをわざわざ2本にしている点に、ホテリ・アアルトの計画を読み解く鍵があるような気がしている。

新築として計画されたなら、客室内にわざわざ柱を立てるようなことはしないだろう。改修という足かせによって出現した柱の意味を、「改修だから」ではなく、空間の設えとして必要なものとして存在するよう調整されている。

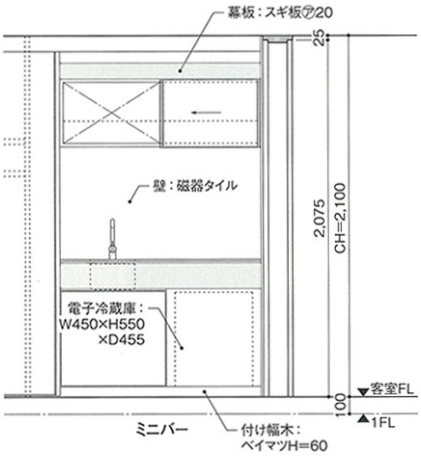
また柱はむき出しにはせず、丁寧にムクのタモ材を巻いている。これも改修をホテルの設えの根拠とせず、意志を持って普遍的な空間をつくりたいと願った設計者の意志の表れではないだろうか。

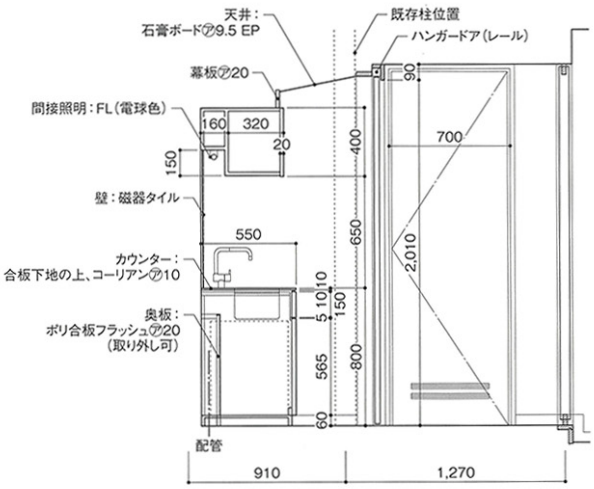
既存の壁を残し、ベッドルームとソファコーナーを仕切っている。天井と壁に囲まれたソファコーナーは、窓から漏れ入る光がたまり、一人の時間を過ごすための最高の居心地を生み出している

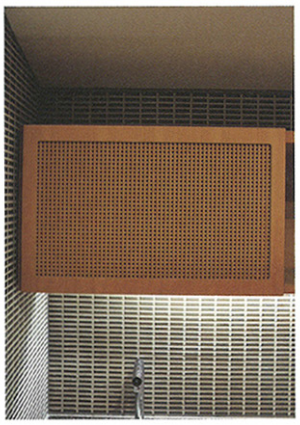
201 ROOM

ユーティリティも温かみある素材使い

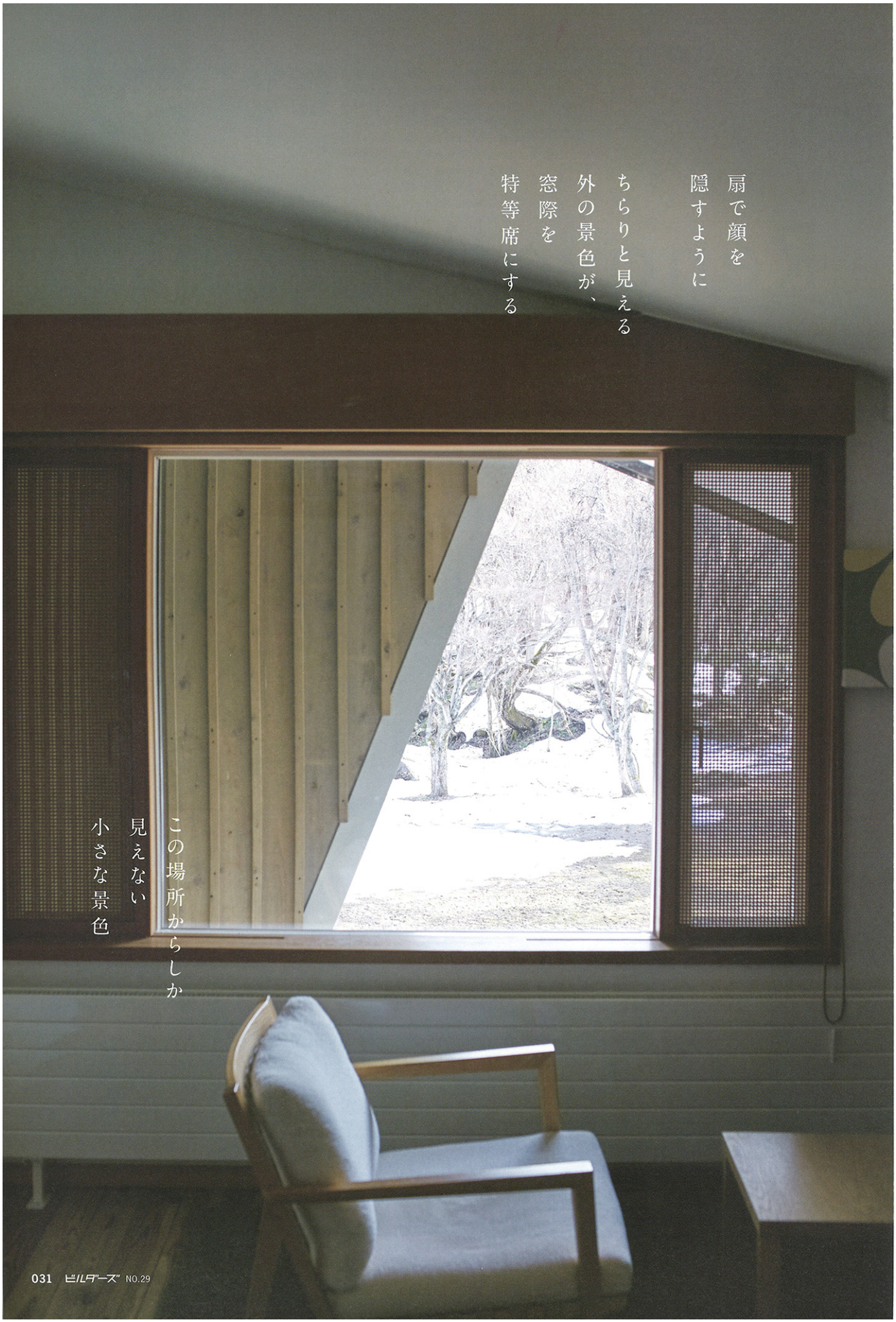
バーコーナー断面図 S=1:40
※検討図のため、実際と異なる部分があります







各室にはバーコーナーが設えられている。壁面に張られたタイル（花椒モザイク／ダントー）は、アルヴァ・アールトによるテキスタイルSIENAのパターンを連想させるようで、設計者の遊び心がうかがえる。吊り戸棚の引戸は、窓に設けられた網戸格子と同じもの（こちらは網なし）が使用されている。こうした部分の繊細なつくりが、全体のおおらかな空間を引き締めている



扇で顔を
隠すように

ちらりと見える
外の景色が、
窓際を
特等席にする

この場所からしか
見えない
小さな景色

Renovation Design

2008年 ホテリ・アアルト改修計画

骨組みという制約の中で居場所を解いていく

ホテリ・アアルトは、かつて百貨店の保養所として建てられ、その後埼玉県上尾市の保養所となっていたものを、メンテナンスを担当していた地元の工務店・八光建設が取得し、ホテルに改修したもの。国立公園内のため、建替えには法的なハードルがあったことも事実のようだが、八光建設の社長であり、このホテルのオーナーの宗像剛氏は、あるものを生かして再生するという手法を積極的に選んだようだ。宗像氏は、改修設計を建築家の益子義弘氏に依頼した。条件は、既存の骨組みを使うこと（柱は1本も取り除かない）と、地場の木材（1里内で調達できる材）を活用することだったという。

計画には益子義弘氏を筆頭に、東京藝大の後輩でもある河合俊和氏と、地元で美術館などの設計をしていた大竹慎太郎氏らがチームを組み、宗像氏も施工責任者として加わって進められた。既存躯体を残してスケルトンにし、そのうえで必要な構造柱の位置などを注意深くプランに落としていった。

こうした足かせを計画に課したことで、プランニング上の不合理や不自由が多分にあったことは想像に難くない。実際にいびつな形をした客室や、不自然な位置に落ちた柱など、きっと頭を抱えるような問題は山ほどあったはずだが、益子氏らは最終的には何事もなかったかのように建物全体を品格あるホテルへと昇華させた。

特筆すべきは、住宅設計によって磨かれた設計手法が、ホテルの改修設計においても存分に生かされている点だろう。既存躯体という制約を、尊重すべき「個性」としてとらえ、制約を感じさせることなく空間に取り込まれている。

保養所時代の建物の写真と現在の外観とを比べると、これが同一の建物であるとはとても思えない。構造には手を入れていないので、屋根勾配や全体のボリュームは変えようがないが、開口部の操作やプログラムの整理によって、建物はかくも美しく生まれ変わるのだということを思い知らされる。ストックを活かしながらも美しい建築はつくれる、というお手本のような事例ではないだろか。建築はプロポーションであるとつくづく感じる

301号室
（反対側が304号室）

201号室

増築した食堂

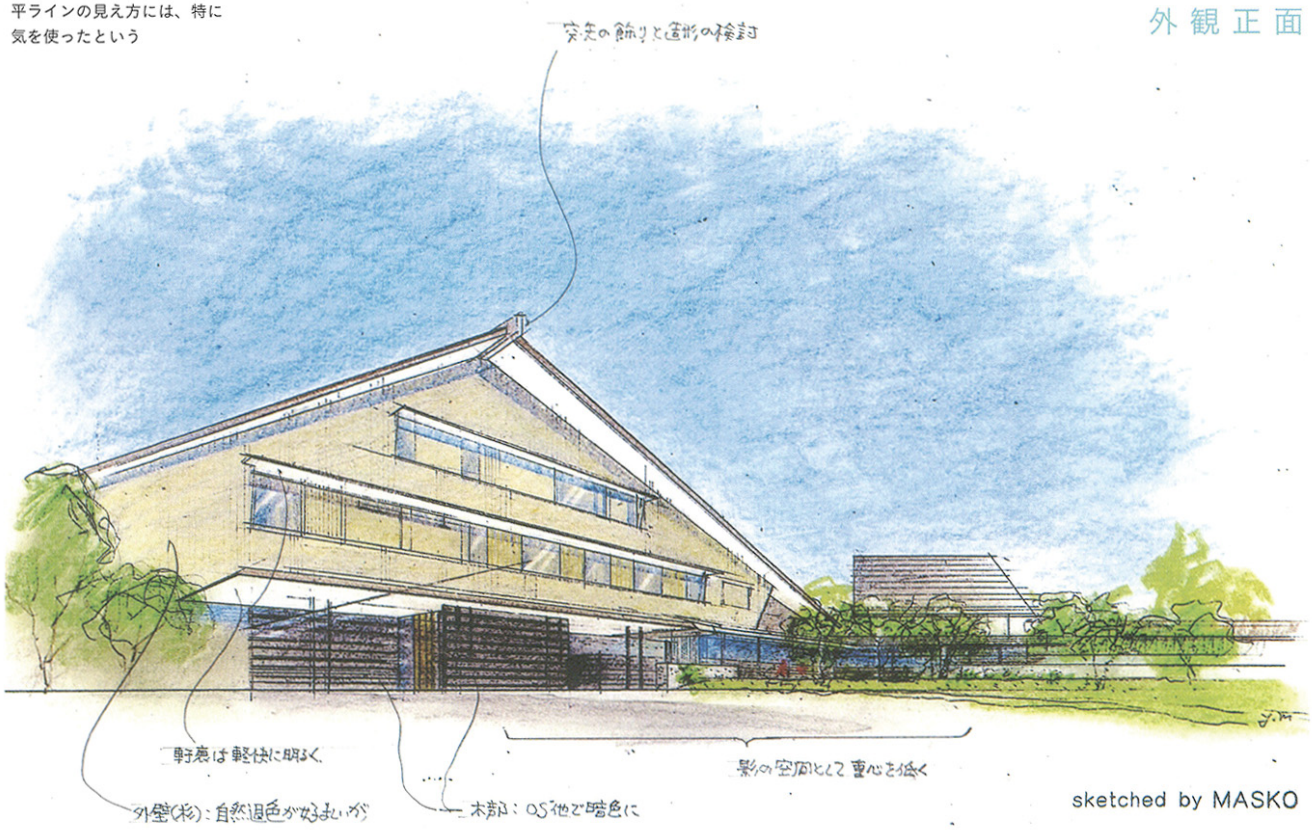
HOTELLI aalto

所在地：福島県
設計：益子義弘＋河合俊和＋大竹慎太郎
（プロジェクトアドバイザー：梅沢典夫）
施工：八光建設
敷地面積：22,491㎡
建築面積：1,137.6㎡
延床面積：1,268.5㎡
構造：鉄筋コンクリート造＋木造
（地下1階地上2階建て）
工程：設計期間2007年10月～2008年10月
施工期間2008年10月～2009年3月（竣工）

・AFTER・

Façade
外観正面

益子義弘氏によるファサードデザインの素案。開口部の水平ラインの見え方には、特に気を使ったという



sketched by MASKO

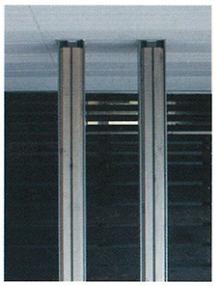
ファサードの改修前と後。もともと1階はガレージで、エントランスは2階だったが、改修によって1階をエントランスにして、2・3階は窓の水平ラインが美しいファサードに生まれ変わった

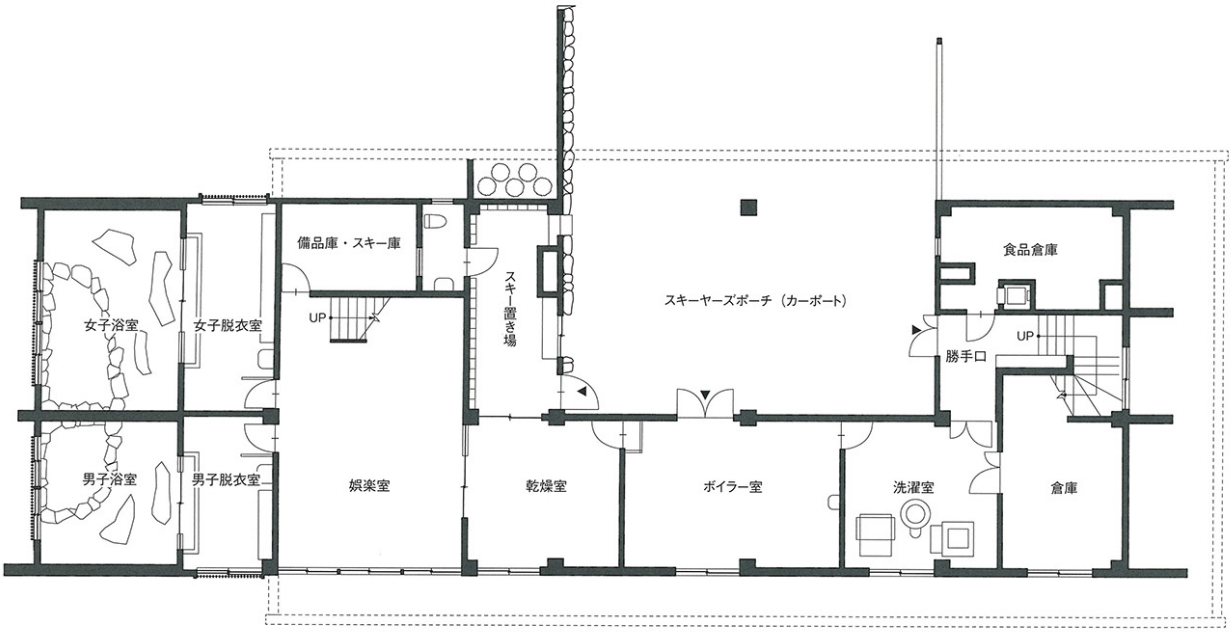
ホテリ・アアルトは、すべての客室のプランが異なることが特徴のようにしばしば言われるが、既存のフレームのなかで、居場所を解いていくことを考えれば、すべて異なることのほうが自然であり、新築で計画されたとしても、このようなプランを模索したのではないか——と思わせるところもまた、このホテルの魅力である。

どの部屋にも特徴があり、語るべきことは多くあるが、改修手法が象徴的に現れている客室として、本稿では201号室と304号室を取り上げた。大屋根の下に生まれた小屋裏空間のような201号室と、ほぼ2層分の吹抜けを持つダイナミックな3階の客室（4室あるが304号室はそのひとつ）。対照的な2室だが、ホテリアアルトを語る際には外せない空間といえるだろう。

1st.Floor PLAN
1階平面計画

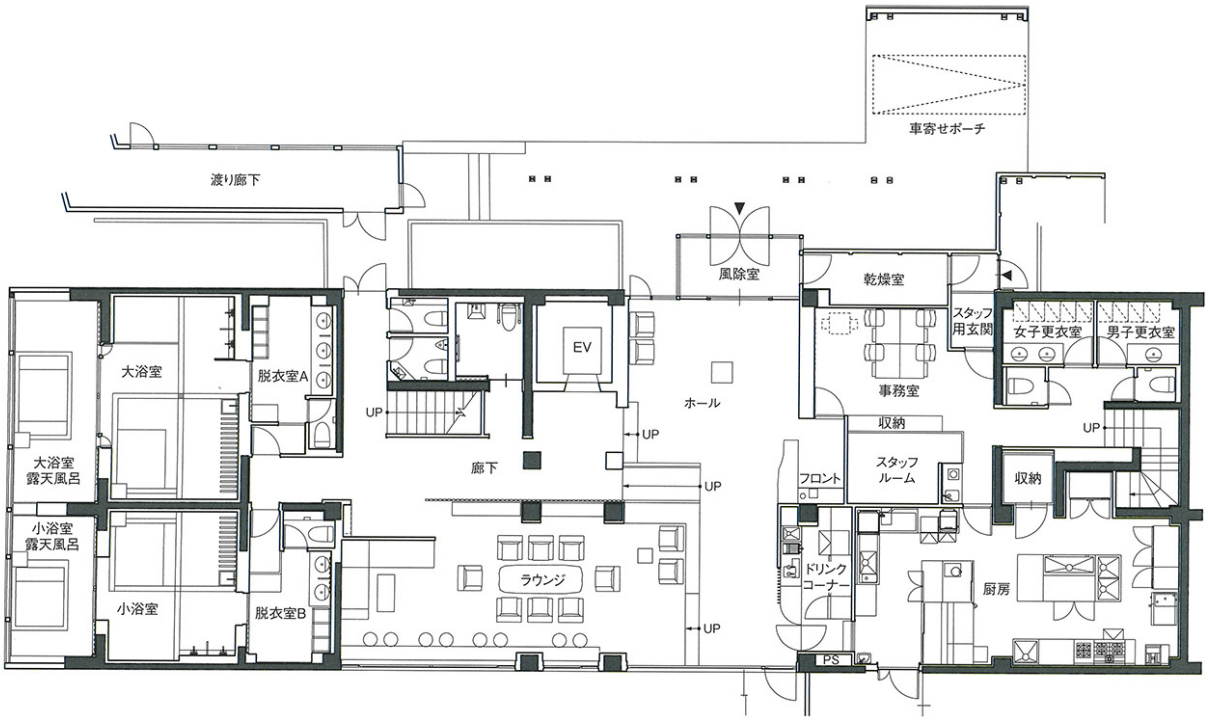
エントランスのキャノピーは改修によって新しくつくられた部分である。鉄骨で骨組が組まれ、その柱がピロティ部に表出している。ここに現れた2本でひと組の鉄骨柱の無骨さをやわらげるように、木の装飾が施されている。2本柱は201号室にも見られ、ホテリ・アアルトを象徴するデザインアイコンの1つである。このエントランスの鉄骨2本柱もまた、おそらく構造だけではなく、設計者の美的感覚によって整えられた部分に違いない





改修前 1階平面図 S=1:200

・BEFORE・



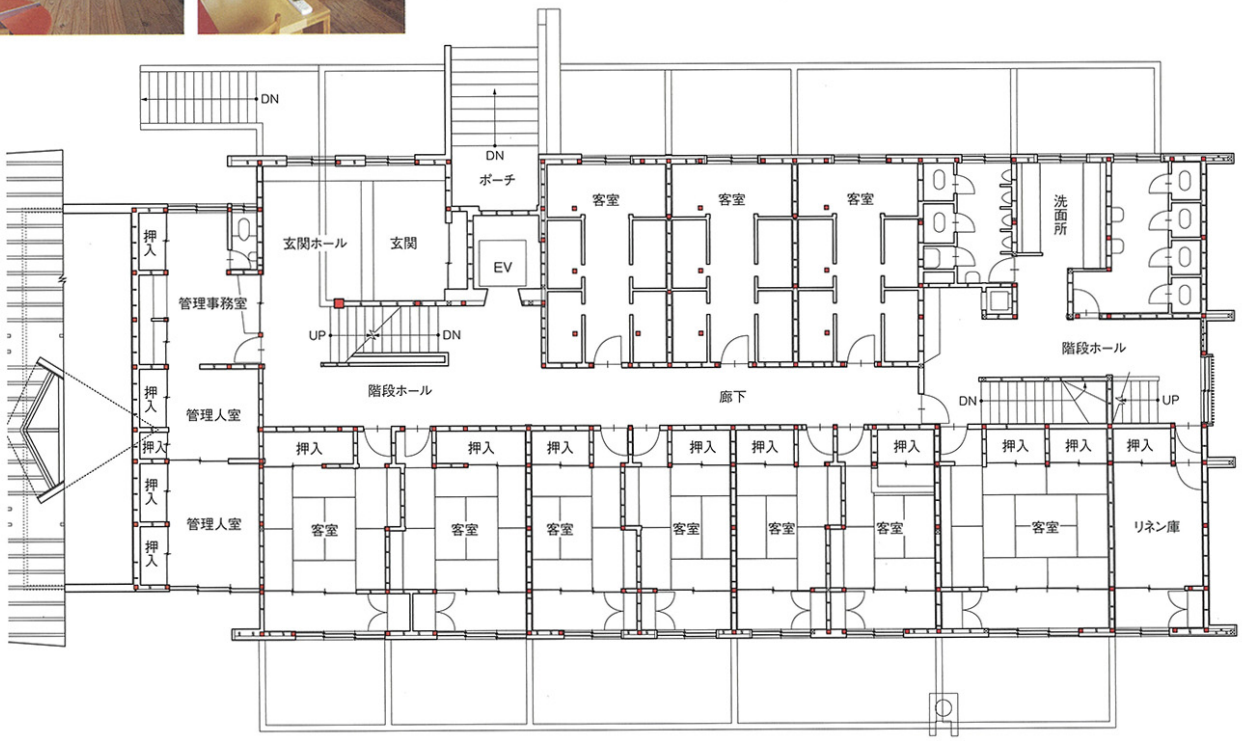
改修後 1階平面図 S=1:200　※建築基準法上は、地階扱い

・AFTER・

2nd.Floor PLAN

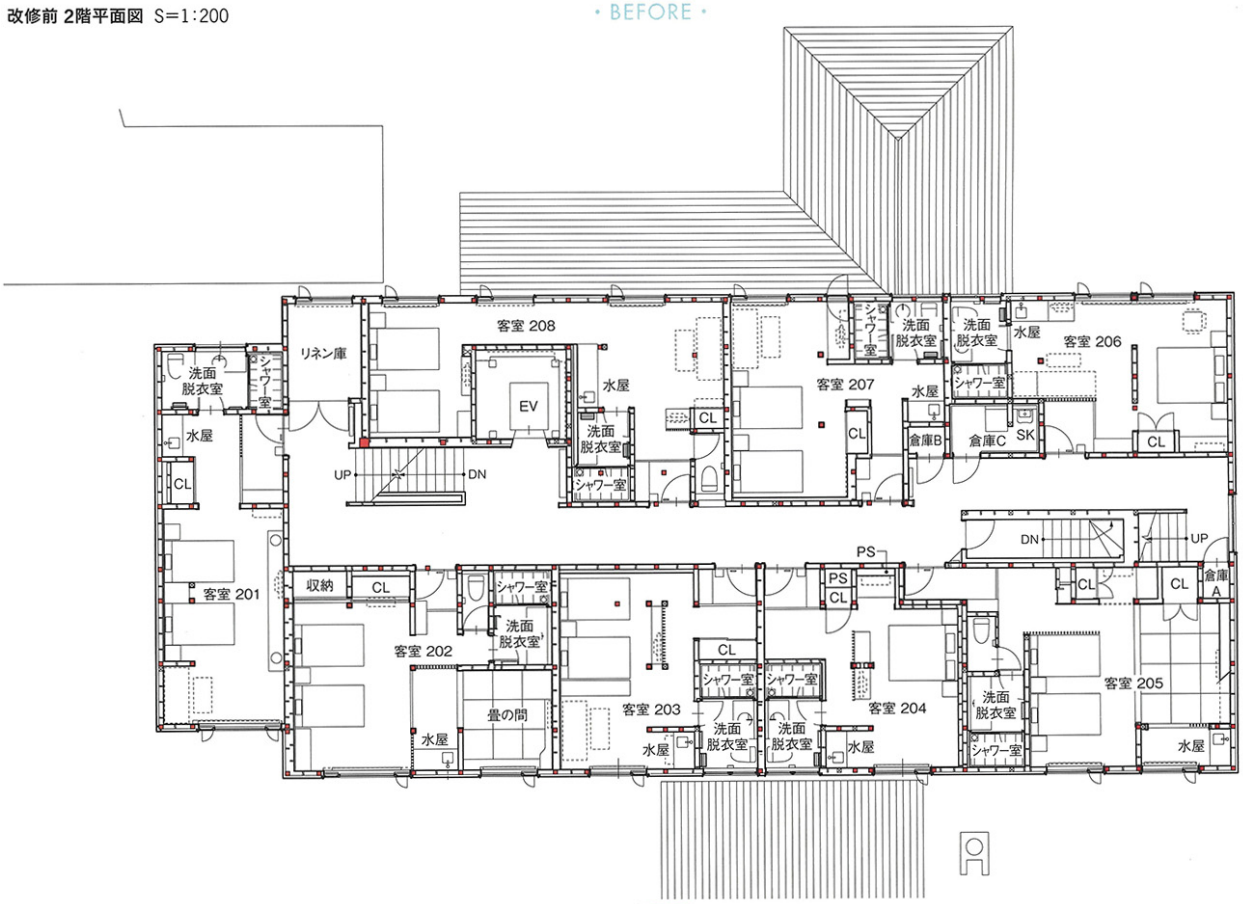
2階平面計画

203号室は、テレビボードを支える小壁として既存柱を生かしている。また、EVシャフトがある208号室は寝室とリビングを廊下でつないでいる。各部屋には、既存躯体を空間に取り込む工夫が随所に見られる



改修前 2階平面図 S=1:200

・BEFORE・



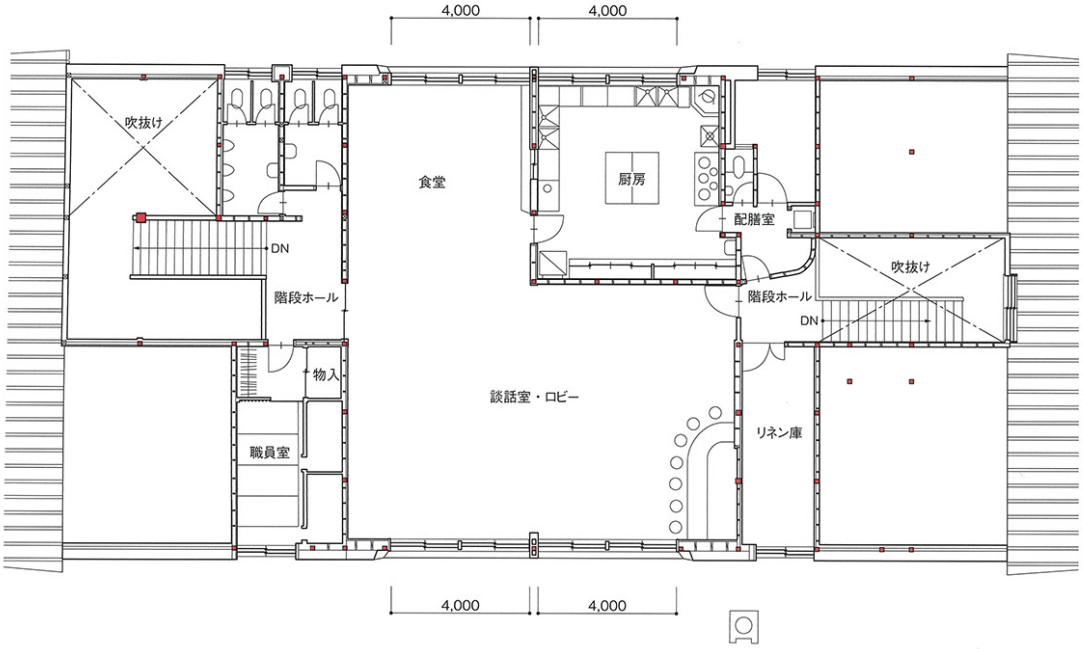
改修後 2階平面図 S=1:200

・AFTER・

3st.Floor PLAN

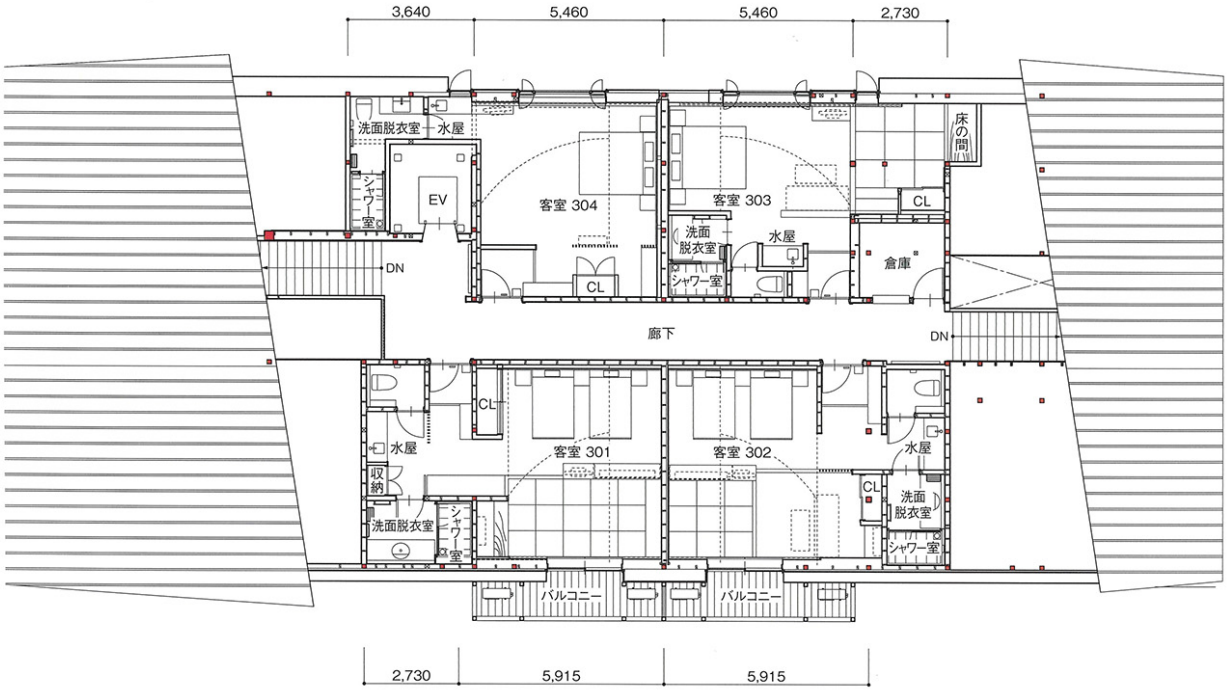
3階平面計画

303号室に現れた既存柱は、和室とリビングを仕切ると同時にボールト天井の始点を支えているようにも見える



改修前 3階平面図 S=1:200

・BEFORE・

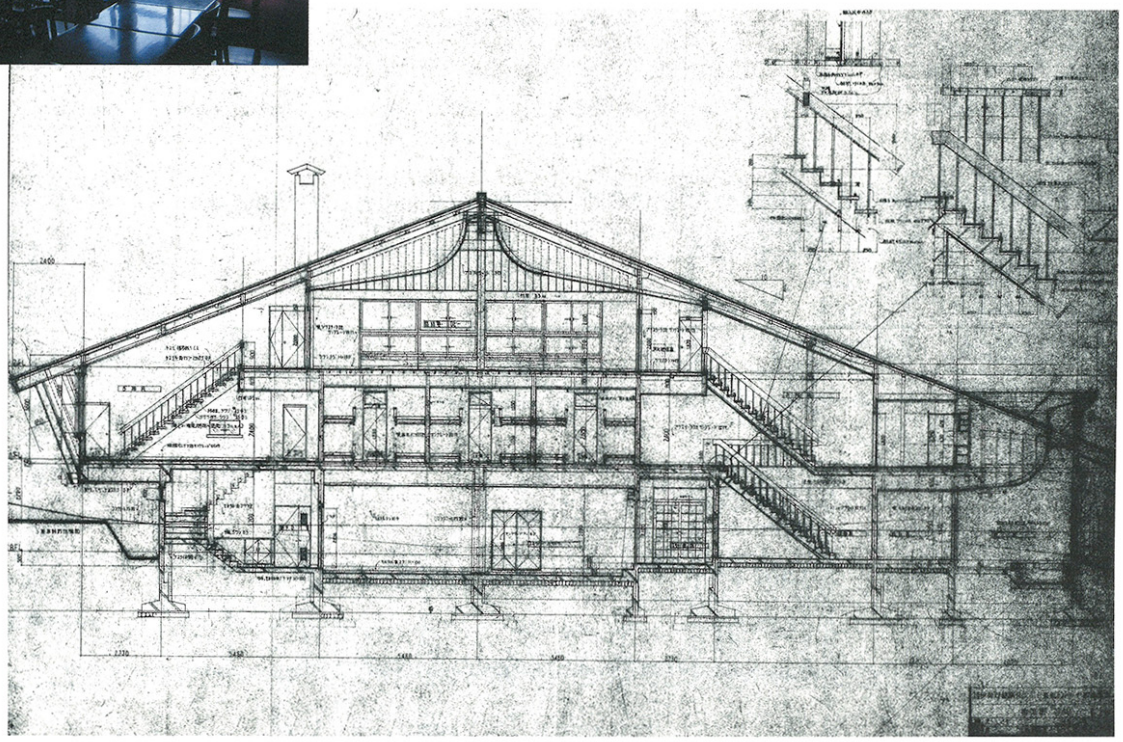


改修後 3階平面図 S=1:200

・AFTER・

Section
断面計画

改修前の3階は、食堂だった。
勾配天井の大きな吹抜け空間
に大開口

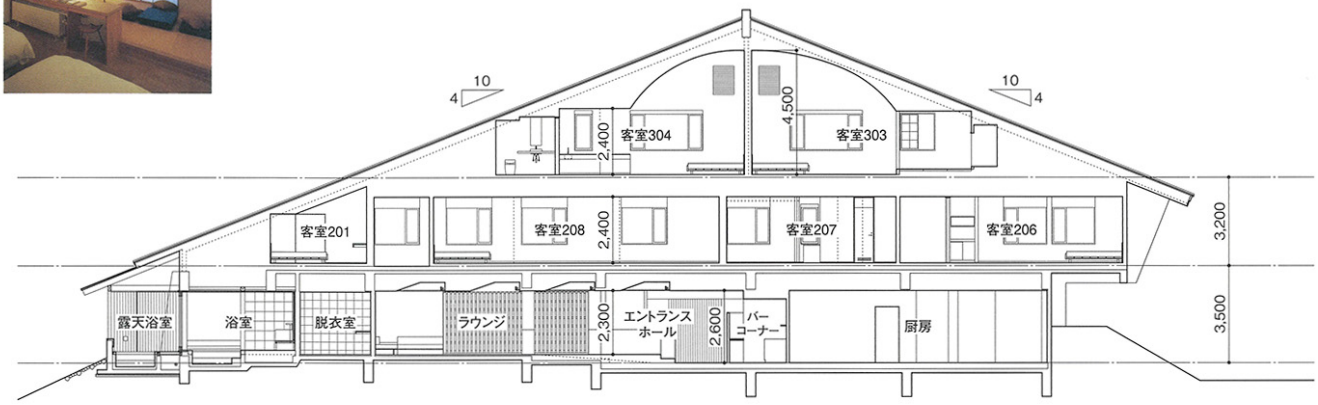


改修前 断面図

・BEFORE・

その場所がもつ
個性を読み込んで
心地よさを寸法に
落とし込んでいく

301号室は大きな空間ボリュームのなかにベッドルームと和室をつくり、家具で仕切っている。上の改修前の写真を見なければ、この部屋の天井高が改修による既存フレームから導き出されたものとは気づかない



改修後 断面図 S=1:250

・AFTER・

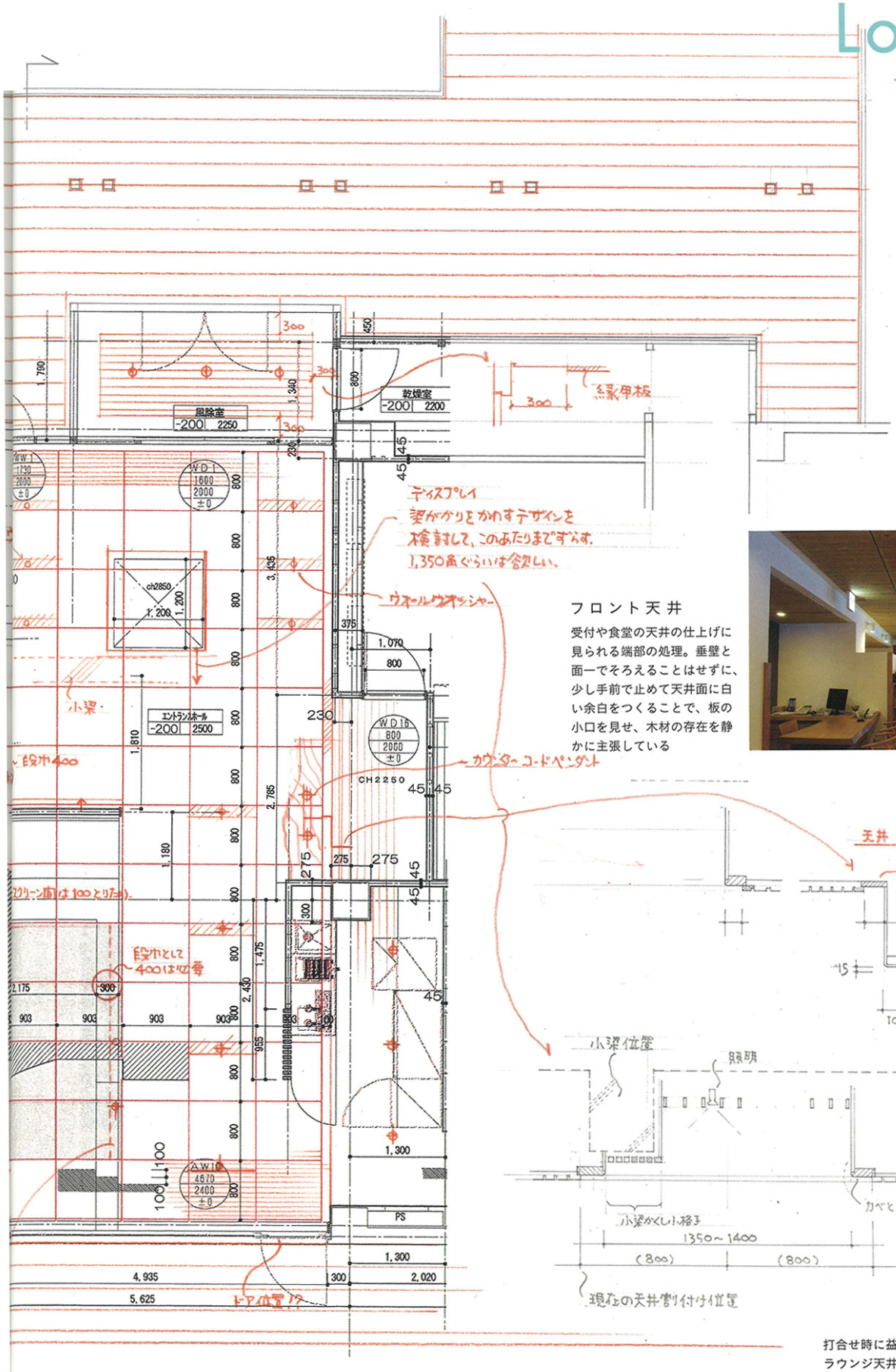
居心地のよさを生み出す おもてなしディテール

レンガの床に、木製の小幅板に覆われた天井というのは、北欧建築を彷彿とさせる。天井の一部はリズミカルに折り上げられ、ひとつながりの空間の中に視点の変化をつくることで、ひろがりや奥行きを生み出している

Hospitality in Detail

ホテリ・アアルトは極めてホスピタリティの高いホテルであるにもかかわらず、そこには一定の〝ゆるさ〟がある。そこに、益子氏が生み出す居心地のよさの本質があるのではないかと思っている。ここでいう〝ゆるさ〟とは、空間の謙虚さのようなもの。それは、自らは主張しすぎず、相手の受け止め方に委ねるような一歩引いた設計姿勢とでも言おうか。私が北欧建築にも強く感じるそれが、空間の緊張感をやわらげ、建築の利用者に安らぎを与えているのではないか。言い換えれば「おもてなしの建築」。居心地の根にある「空間の謙虚さ」について、私たちがホテリ・アアルトから学ぶべきことは多くあるように思う。

Lounge
ラウンジ計画

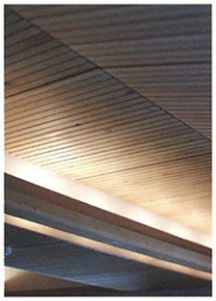


フロント天井

受付や食堂の天井の仕上げに見られる端部の処理。垂壁と面一でそろえることはせずに、少し手前で止めて天井面に白い余白をつくることで、板の小口を見せ、木材の存在を静かに主張している

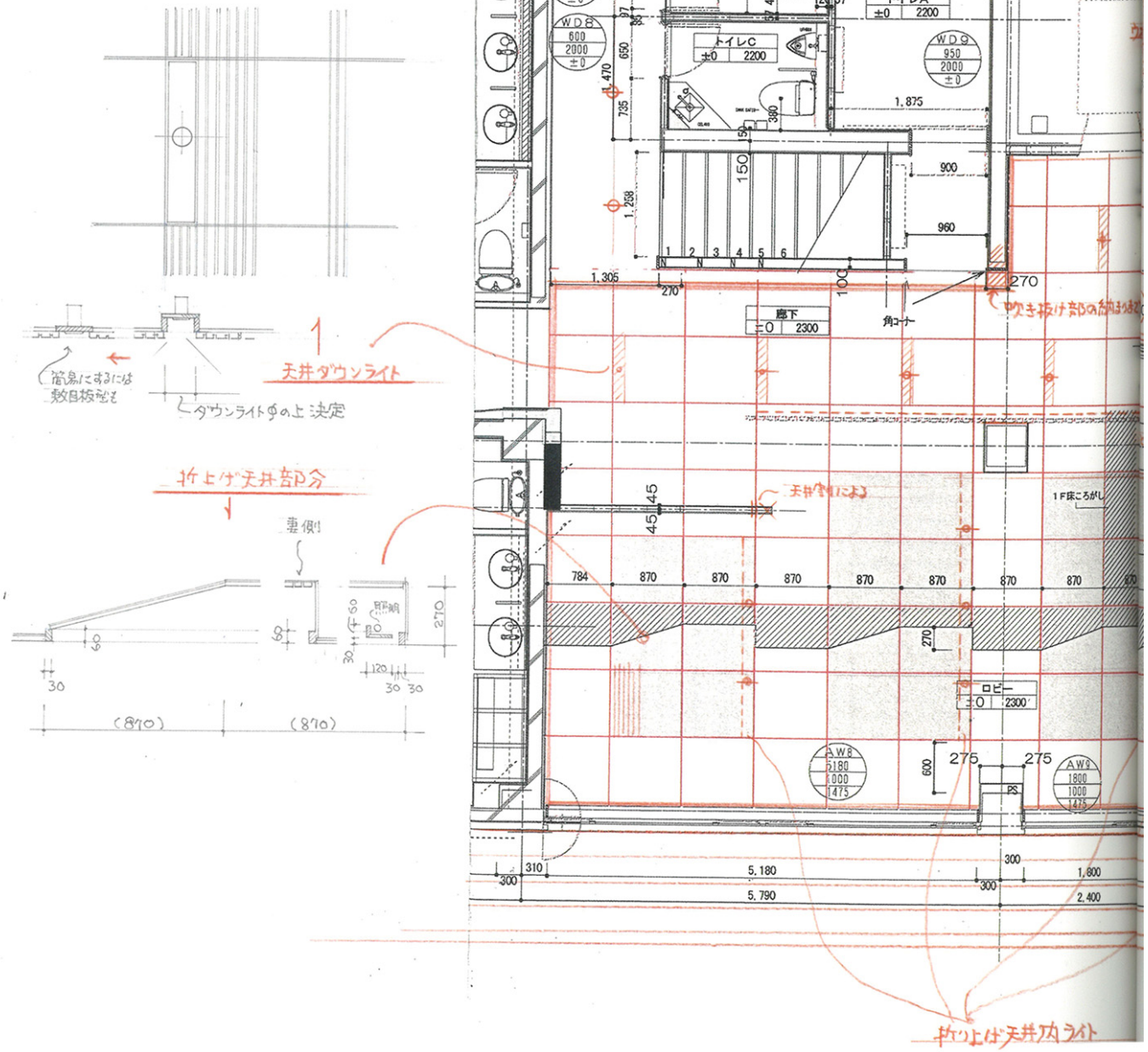
打合せ時に益子氏が赤ペンで加筆した1階ラウンジ天井の検討図

S=1:70(1／50の原図を70%縮小して掲載)



折上げ天井

ラウンジの折上げ天井の間接照明は、天井面とは微妙に高さが変えられ、縁も切られている。軽やかな光と、見る角度によって見え方も複雑に変化するような演出がなされている。特徴的な天井の板はよく見ると幅広板にスリットが切られており、小幅板のように見せていることが分かる。さらにこれをグリッド状に割り付け、板ではなく「パネル」として見せている点も興味深い。羽目板天井にするという選択肢もあったと思うが、そうすると和風の温泉旅館のような雰囲気が醸し出されることになる。そうではなく、さりげなく北欧のもつ大らかな安らぎ感へとつなげているようにも思える部分だ

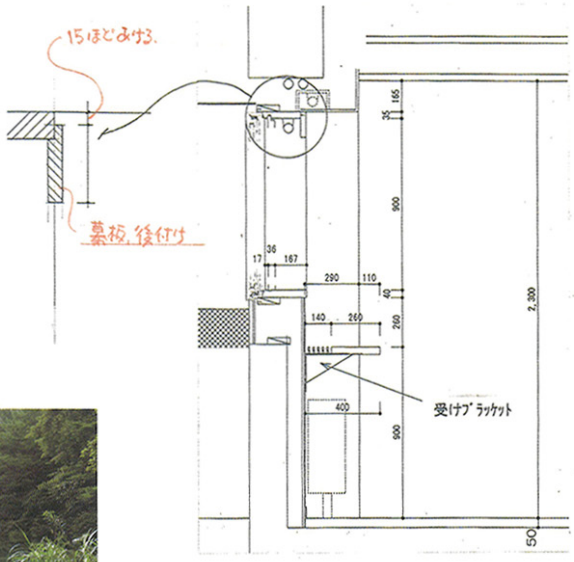


Common Area
共用部の設え

必要な場所に必要な処理を
優しく温かく

窓廻り

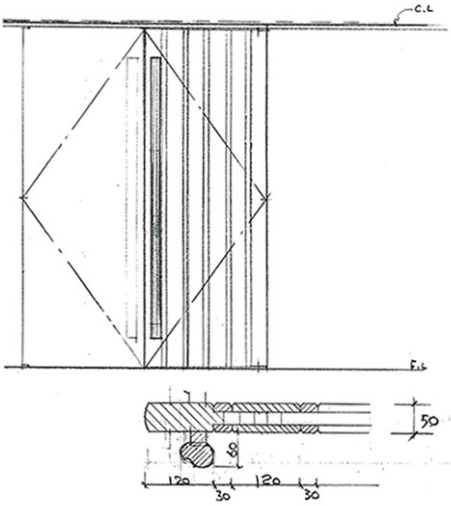
深い積雪を意識し、やや高い位置に切られた水平窓は、冬は積雪面とそろい、幻想的な風景を見せてくれる。開口上部の幕板はブラインドなどが取り付いているわけではないので、どうやらカーテンボックスということではないようだ。しかし、これにより視野が調整され、意匠にも強い水平性がもたらされている。カウンターも同様に幕板が張られている。これは足元のパネルヒーターの暖気が奥のスリットから流れるように操作したものだが、やはり空間に水平性をもたらしている。ホテリ・アアルトには、一見すると機能とは別の理由から設けられたこうした設えがいくつも存在する



※　検討図のため、実際と異なる部分があります

沼辺のテラス

沼の畔のデッキテラスは、水辺まで近づき、目の前に広がる美しい自然と対峙できる居場所としてつくられたもの。地表すれすれに敷かれたウッドデッキは随所が切り欠かれ、沼辺の岩が枯山水のようににょきっと顔を出しているというユニークな設え。沼が増水すればそのまま水没してしまうそうだ。現在、ウッドデッキは、経年変化によってこの写真の撮影時よりもずっと地面になじんでいるという



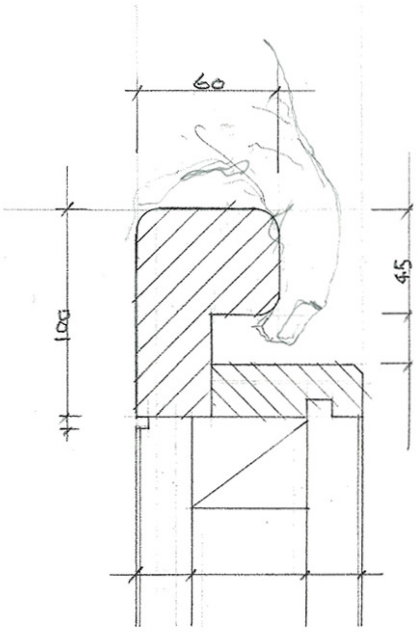
エントランス

メインエントランスの扉は木製。引手は金属ではなく、無垢の木から製作されている。雪深い地に建つホテルのエントランスで、引手が木製である意味は考えるまでもない。また宿泊者と建物とが最初に〝握手〟する場所でもあり、この部分に設計者が自ら線を引いた引手を設けることの意味は大きいように思う

コーナーガード

共用部や客室など随所にみられる木製のコーナーガード。デリケートな壁を守る役割を果たしている。宿泊したらこのコーナーガードの、随所のちょっとしたデザインの違いにもぜひ着目してほしい。共用部はしっかりと、客室はさりげなく繊細に。住宅においても見習いたいディテールだ

建物と握手する場所に宿る設計者のおもてなし



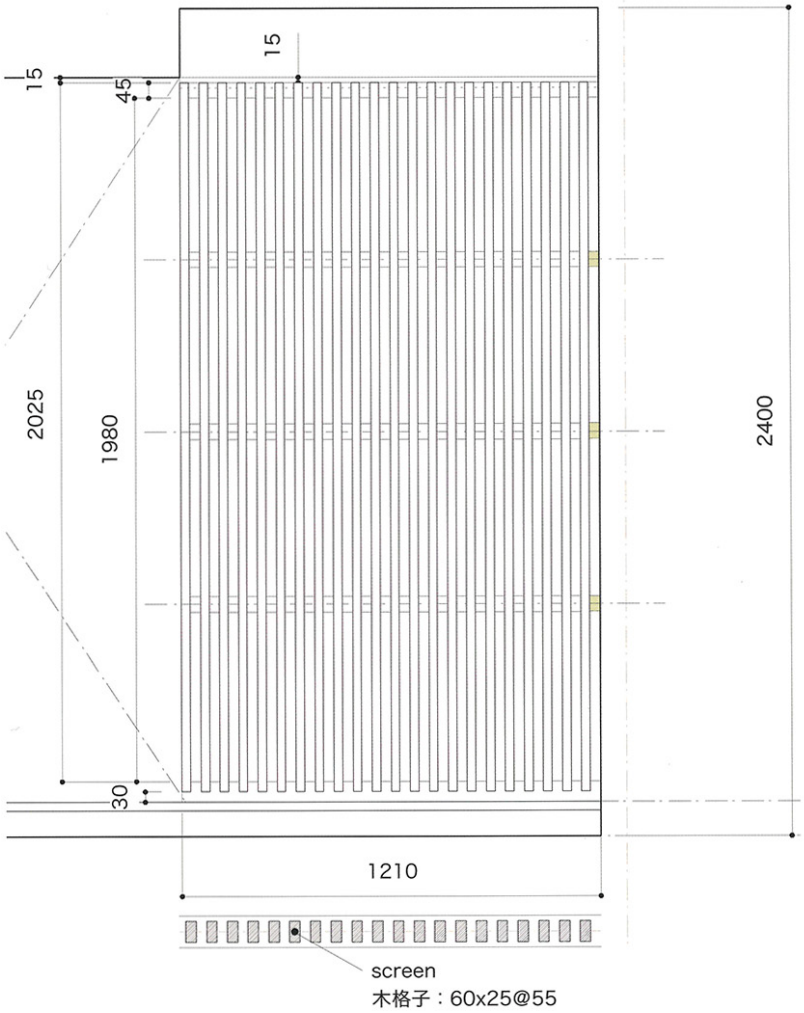
階段手摺

宿泊者の安全を確保する階段手摺は、しっかりと安定感のあるつくりとなっている。ここで着目してもらいたいのは、頂部のデザインである。手摺壁の厚みそのままでは、無骨すぎて握りずらいため、手摺頂部にくびれをつくり、木製の手摺をちょうどよい感触で握れるようにしている。当たり前のように見えて誰も気に留めないが、本当に優れたディテールというものはそういうものだ

Guest room
客室の設え

緩やかに仕切る木製のスクリーン

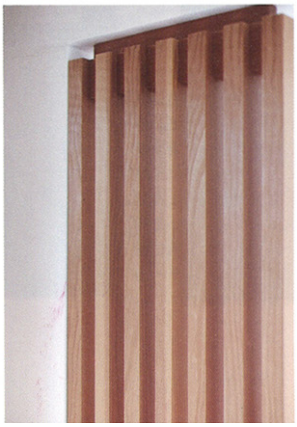
木製格子詳細図 S=1:20



間仕切り

木製格子の間仕切りは、上下の端部を浮かせることで、軽やかに見せている。こうしたスクリーンほか各部の納まりや精緻さは、ともに取り組んだ河合俊和氏の力が大きいと益子氏は話す

このホテルを語るうえで、木製スクリーンの存在をはずすことはできない。304号室では、デスクスペースとベッドルームを縦格子が仕切り、領域を隔てながらも曖昧につなげる役割を果たしている。こうした縦格子のモチーフは、各客室をはじめロビーなどホテルの随所に現れ、設計者がデザインの要として用いていることが分かる。また、縦格子には、単調になりがちな空間にリズムやメリハリをもたらす意味もある。それらは窓の外の木々のシルエットとも注意深く重ね合わせられているようだ。実際、アルヴァ・アアルトのマイレア邸などでも室内の垂直柱を、窓の外の森の木々と連続させるという手法が使われている。



玄関廻り

玄関脇にはスギの3層材でつくられた下足入れがある。これは同時にベンチとしても機能し、靴の脱ぎ履きの際に腰かけられる。何気なく見えて、これはここで靴を脱いでほしいという明確なメッセージにもなっている。客室にムクフローリングを使用しているホテリ・アアルトならではの設えといえる。
また、扉の横には見慣れない不思議な木箱が付いている。これは扉を開けることなく宿泊者に夜食を差し入れてくれるホテルからのサービスのためのもの

静かな心遣いに顔がほころぶ

北欧家具

各客室に北欧の名作家具やデザインが惜しげもなく置かれているのも、ホテリ・アアルトの特徴。このほか、共用部にもハンス・ウェグナー、ボーエ・モーエンセン、アルヴァ・アアルトといった北欧の巨匠達による名作家具がふんだんに置かれている。そうした家具を身近に感じながらの宿泊は、日常と非日常が入り交じった体験となるに違いない。また3階の客室では、大胆にも畳の上にラウンジチェアなどが配置されている。北欧家具のもつ簡素で機能的なつくりは、和の空間とも驚くほど相性がよい。高齢者にも嬉しい設えだ

クロゼット

ハンガーパイプにはステンレスではなく木製の丸棒を使用している。小さなことと思われるかもしれないが、私はこういうところにこそ惹かれてしまう。つまり、クロゼットなど人が期待をかけないようなところは設計者もつい力を抜きがちだ。ところがそういうところに気を配ってあると、人はぐっと心を掴まれてしまうのである

各所扉

クロゼットやトイレ、洗面所など客室内の扉には、面材にポリ合板が使用されている。これは住宅と異なり不特定多数の人が使用することを想定したためだろうが、一方その大手には無垢の堅木がしっかりと練り付けられている。また引手には住宅のような木製引手を用いており、やはり建物と宿泊者が“握手”できるところをつくっている。こういう丁寧なつくりが、ホテリ・アアルトを住宅的な設えに見せている点であろう

建築は
覚えていなくてもいい

なんか気持ちよかったねと
過ごした時の記憶を
持ち帰ってくれれば——

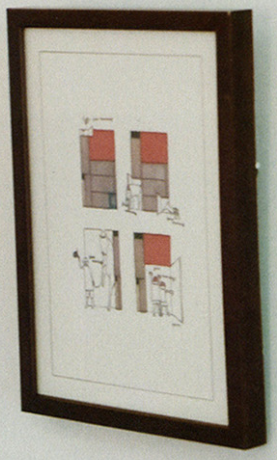
Y. Masuko

ホテリ・アアルトに宿泊して、ひとつ分かったことは、ホテリ・アアルトの空間設計は宿泊者を追い越さない設計なのだということ。宿泊者に気を遣いすぎないことが真の気遣いであるということを教えられた。緻密に考えられているのに、そこには独特の大らかさがある。あたかも、些末なことをとやかく論ずることが野暮であるかのように。

住宅を設計する際、転ばぬ先の杖をどれだけ設けるかを考える。しかしどれだけ杖をついてみたところで、完璧な仕事にはほど遠い。ひとつを解決すれば、また次の問題が起こる。人が人を満足させるというのは本当に難しいことだ。

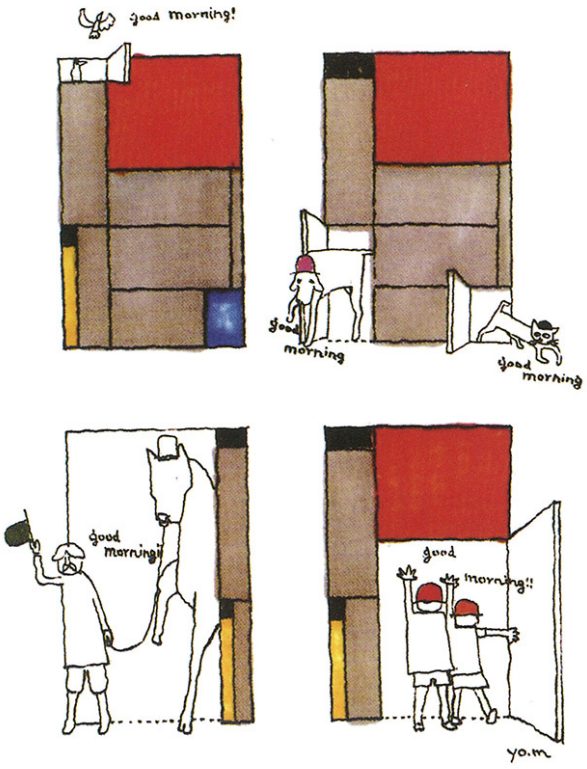
今回のホテリ・アアルトでの宿泊は、私たちの抱えていた、そんな答えのない問いのようなものに「自分が気持ちよいと思うことを素直に考えてごらん」と答えてくれる素晴らしい体験となった。

益子氏はよく〝こく〟という言葉を使う。〝おもてなし〟と同様、英語には翻訳できない言葉だ。〝こくのある空間〟と〝おもてなし〟、それこそがホテリ・アアルトの居心地なのだろう。



玄関や客室、共用廊下に掛けられている「とびら」をモチーフにしたイラストもすべて益子氏によるもの。室名板に描かれた鍵のイラストも益子氏によるもので、実際の客室の鍵もレトロな形状のものが採用されている。「とびらを開く」というのが、ホテリ・アアルトの裏テーマになっているのかもしれない

とびら



息子がまだ幼いころだった。

いっしょに紙にいたずら描きをしているうちに、おうちの話になって、じゃあ窓や入り口を描かなくちゃねと手を進めた。

どんな窓にしよう、入り口はどこにあるの？　なんて話しながら、こんなかたち？　あんなかたち？　大きなゾウさんも入れてあげようか、ちっちゃなネズミくんだったらどうしようと、しばらく遊んだ。

そのうちに子どもは飽きてよそに行ってしまい、でもなんだかぼくのほうが面白くなって、それからあれこれと考えもした。

ふだん建築の設計をしていて、もちろんドアや扉もデザインする。でもずいぶん固く狭い範囲でしかそのありようを考えていなかったことに思いが向かったのだろう。そんな遊び絵の中から、ひとつの扉からさまざまなイメージが飛び交いはじめ、その後も時々スケッチブックの片隅にいたずら描きをするようにもなった。

ここに掛けているのは、むかし描いたそんな扉の遊び絵のいくつかです。

扉を開けると、そこに今まで知らなかった新しい世界が広がっているかもしれない。ホテルのルーム扉にも、そんな期待があるのかもしれません。

益子義弘